

映画『かもめ食堂』を通じた共生への問い —異文化の“はざま”を産む身体—

Reconsideration of Symbiosis through the Film "Kamome Syokudo" —Body to produce "Betweenness" of Different Cultures—

横田 和子
Kazuko YOKOTA

Keywords : symbiosis, body, betweenness, others

キーワード：共生・身体・はざま・他者

1. はじめに 問題意識

筆者はある大学で「共生社会」に関する演習¹⁾を担当している。参加学生をみていて感じるのは、自分たちのコミュニティ内部やグループ内部などの内輪の「共生」には気を遣うのに、グループ間、あるいはコミュニティ間の「共生」についてはそもそも関心が薄いように思われる点である。そのような「共生」観は、グループ間、コミュニティ間などの日頃の関係性をどのように捉えているのか、あるいはそうした関係性においてひとたびトラブルが持ち上がったとき、どのような問題解決をもたらすのだろうか、という疑問を生じさせる。むろん、この問いは学生のみに向けられた問いではなく、学生を通してみた筆者自身、あるいは筆者を含む社会に共通して向けられ得る問いでもある。

今日、教育の場で共生社会の構築は重要な目的とされ、そのための一つ的手段として異文化理解・異文化交流を促し奨励すること、コミュニケーション力をはじめとした各種〇〇力を個人が獲得することを奨励するのは当然のこととされている。そのための場づくりや、学生の内向き指向の克服の必要性などはしばしば指摘されているし、文科省の進める「グローバル人材育成」のかけ声も（「人材」ということば遣いに違和感は拭いきれないが）、目的として重なり合うところがないわけではない。とはいえ、これらの理念を載せたことばがどれだけの内実をもって教育現場に受け止められているのかは定かではない。実際、異文化交流や理解のための場が設けられたからといって必ずしも予定通りに異文化理解や異文化交流が進むとは限らず、むしろそうした場での経験が本来の意図するところと反対の効果を生むこともままあることが指摘されている²⁾。生身の人間が、変容し続ける文化と交わるなら、絵に描いたような異文化

理解が予定調和的に成し遂げられるものではないことは当然である。一人一人がコミュニケーション能力を獲得すればグローバル人材になり、そのグローバル人材が集まれば共生社会ができる、というような発想は、実は本当はひとりひとりの成長も、あるいはひととひとの「あいだ」にある無数の関係性の変容のことも、何も見据えてはいないのではないだろうか。そう考えると、異文化間あるいは多文化の共生を考える別の問いの立て方こそが、今求められているように思う。

異文化理解や異文化交流に絞っていえば、それらは人間の生身の経験の過程と結果においてあらわれてくるものである。ならば、あらかじめ「異文化理解」を目的として設定することは、そのプロセス自体になんらかの変更を生じさせるだろう。更には、そのような目的掲げることによって失われてしまうものがある可能性については十分な議論がなされていないのではないだろうか。そこで本稿では、異文化理解・異文化交流を明示的に目的化しないことで、むしろそれを遂行する戦略について考えてみたい。本稿がその手がかりとするのは、映画『かもめ食堂』(荻上直子監督、2006)に示された身体技法である。

『かもめ食堂』は、ヘルシンキで食堂を切り盛りする日本人女性を中心とした寓話的な物語である。本稿では、この劇中にて展開するエピソードと人物の描写を通して、間文化性を創造するコミュニケーションおよび身体技法のありようを検討していく。映画はフィクションである。しかしフィクションであっても、否、フィクションであればこそ尚、そこでは観るものへの説得力が必要となる。ここではその説得力の構築に一役買っているであろう要素として身体技法を捉え、身体を軸とした共生のための教育の問いの立て方についての考察を試みる。

2. 身体と共生—問題の背景となる二つの文脈

ここでなぜ身体と共生が問題になるのか、あらかじめ述べておきたい。まず筆者の関心は、文化間における共生へのベクトル(共生とは静的な状態ではなく、常に動的な方向性であると考へ、こうした表現を用いている)を探す際の、個人もしくは共同体が言語化・自覚化・意識化できないような技法にある。それらをまとめて「身体」の問題として扱う。そして文化もしくは異文化を自明視し対象化した研究に閉じ込められることなく、間文化性intercultureという英語の字義通りにinterを浮かび上がらせることが異文化間教育の課題であると考えている。異文化間教育は既に分野として一領域を築いてはいるが、細川(2012)は、異文化間教育における「間」が日本ではしばしば無視されて用いられてきたこと、「間」の抜けた「異文化教育」化してきたことを指摘している。細川は、interを「2つ以上のものが相互に作用を及ぼし、互いに影響を与え受けあう関係をさす用語」として定義する。ここでは、「間」の字を無視せず、「あいだ」を見据え、再びその流動化を促すための教育として共生のための教育を捉えようとする。文化間の共生のための教育において不可欠な要素として言語や意識の問題はしばしば焦点化される。しかし、その際、同時に問題になってしかるべきは非言語的コミュニケ

ーションや非意識のもつ役割である。それらの学びの支援については、たとえば手塚（2009）などがあり、身体性についても高橋（2004）、戴（2005）などがあるが、これらの先行研究の上に改めて「身体と共生」を中心とした検討を加えたいと考えたのが、本稿の問題意識にある。

次に、「共生」をめぐる教育の文脈がある。周知の通り、現在の教育については多様な問題や危機が指摘されている。だがそれらの内容がなんであれ、それらに対応するだけ、個人を社会に適応させるための教育が主流になっており、これから自分たちがどのような社会に生きていきたいのか、どのような社会を築いていきたいのか、ということを考える機会が隅に追いやられていると感じる。ところが、そこで鍵となるであろう「共生」の概念は、自戒の念を込めて記すが、空疎かつ曖昧なままに濫用されている。そこで、文化間における「共生」を語る際の共生とはどのような状態、あるいはベクトルを指すのか、ある種のビジョンの検討を、この映画を手がかりに考えてみたい。ここでは「共生」のイメージを統一するのではなく、イメージづくりにより深く没入したり、イメージやビジョンを広げ、膨らませるための取っ掛かりとして、映画を用いることとする。

以上の文脈をもとに本題に入っていく。なお、映画のあらすじは以下の通りである。

サチエ（小林聡美）はフィンランドのヘルシンキで「かもめ食堂」という名の日本食の食堂を営んでいる。ある日やってきた日本かぶれの青年に「ガッチャマンの歌の歌詞」を質問されるが、思い出せず悶々としていると、町の書店で『ムーミン谷の物語』を読んでいる女性ミドリ（片桐はいり）を見かける。試しに「ガッチャマンの歌詞を教えてください!」と話しかけると、ミドリは見事に全歌詞を書き上げる。サチエは彼女を家に招き入れ、やがて食堂で働いてもらうことに。一方、マサコ（もたいまさこ）は二十年に渡る両親の介護を務め終え、息抜きにフィンランドにたどり着いたが、手違いで荷物がスーツケースごと紛失してしまう。航空会社が荷物を探す間にマサコはかもめ食堂にたどりつく。生い立ちも性格も年齢も違う三人の女性が、奇妙な巡り合わせでかもめ食堂に集まった…。ⁱⁱⁱ⁾

3. 『かもめ食堂』におけるコミュニケーションと、それがもたらした変化

3-1 コミュニケーションの基本としての身体、結びつける「食」

ここでのコミュニケーションの基本的ツールは「食」であり「からだ」である。とりわけ、舌であり、胃袋であり、味覚が軸となっている。食堂の客は、食堂で働く者たちとのことばによるコミュニケーション自体を目的として求めているわけではなく（特にフィンランド人と日本人が何かの話題で盛り上がることもない＝一人のアニメオタク青年を除き＝それも必ずしも盛り上がっているわけでもない）淡々と働き手のつくる食事が提供され、それが客によって淡々と消化されていく。しかし、結果としてコミュニケーションが生じている。

さて、なぜそもそも三人の日本人女性はフィンランドに來なければならなかったのか。おそらくそれぞれリスクを冒したり、何かを手放そうと思ってフィンランドに來た、のかもしれない。かもしれない、というのは、映画のなかで彼女達の個人的な事情、具体的な過去、渡航の決断に至ったきっかけなどは、ほとんど語られないからである。従って説明がないので、映画が進行しても、あらたまって個人が抱える問題が解決されるわけでもない。しかし、「何か」があった、ということはたとえばミドリの「來てやらないわけにはいかなかったんです」という台詞などにぼんやりとほのめかされている。なので彼女達は問題を抱えていた／いる、と考えて差し支えないと思われるが、いつのまにかすでに日常のなかで三人で、あるいは客のフィンランド人と、日々共に在る、共在することで、共同体として別のかたちの「問題解決」を実践してしまっている。何も語られないにもかかわらず、共に場を共有することで、いつしか誰かの悩みが解消され、存在が交換不可能であることが結論づけられる。存在の交換不可能性を象徴するのが、エンディングのそれぞれの「いらっしゃい」という発話である（後述）。

3-2. 〈通じること〉と〈通じないこと〉の“あいだ”

3-2-1 通じることがゆえの距離：ミドリ×トンミ・ヒルトネン

映画の前半では、日本人ミドリとフィンランド人トンミ・ヒルトネンの交流が描かれる。ここでは「言語が通じるゆえ」に浮かび上がる距離感が描かれている。ヒルトネンは日本のアニメオタクということで日本語ができる。そこでヒルトネンとミドリが知り合った当初、なぜか必要以上にヒルトネンを警戒するミドリのぎこちなさ、不器用さが描かれる。当初、ミドリは「ひいている」というメタ・メッセージをヒルトネンに向けて発しているが、ヒルトネンの日本への関心の強さにかき消されてそのメタ・メッセージは伝わらない。この、言語が通じるゆえに露になる距離感については、異文化理解や異文化交流において、あまり問題にされない。異文化理解や異文化交流においては、言語ができることは単純に交流を深める道具という語られ方が専らである。言語ができればできるほど、相手との距離が縮まるのだとしたら、「異文化理解」はもっと簡単に成し遂げられるはずである。しかし、ことはそれほど単純ではない。前項でも述べたように、ミドリは日本で、遠くにいかなければならないような何らかの出来事に遭遇している。そのようなミドリが、コミュニケーションをとるべき相手を、言語ができる・できないだけで判断するべくもない。一方、そのようなミドリの背景を知る由もなく、ヒルトネンは無邪気に自分の名前を漢字で書いてくれるようミドリに頼む。そのときミドリが書いた漢字は、次のようなものである。

「豚身昼斗念」

ミドリはなぜ、これらの字を選んだのだろうか。いわゆる「異文化交流」の手軽なモチーフとして、漢字が使われることは珍しくない。交流の場で、非漢字圏の出身者の名前を漢字で書いたことがある、という人は決して少なくないだろう。筆者も同様の経験があるが、仮に「トン」という音があったとして、「豚を選ぶだろうか」と考えてしまう。ミドリが選んだこの字

面から、個人的に筆者が読み取るのは、朴念仁、呑気、特に悩みがない、というイメージである。逆にいえば、筆者だったらもっとかっこいい漢字を選んでしまいそうな気がする。相手を喜ばそうとするか、もしくはおもねるような字を選んでいったような気がする。更にいえば、この字面から読み取れるのは、「意味ではなく音から単純に漢字を選びました」「私、あなたに特に興味ありません」というメッセージである。しかし、なぜわざわざ興味のない人に「興味のなさ」をメタとはいえ伝える必要があるのだろうか。ここに必要以上にヒルトネンを警戒するミドリのごちなさ、不器用さがみてとれる。ミドリと青年の間に恋愛感情が生まれる気配はなさそうだし、そんなにヒルトネンを警戒する必要はさらさらない。とはいえ、ふたりは「互いへの興味のなさ」を前提に、むしろ距離を縮めていくようにもみえる。いつもひとりで来て、タダでコーヒーを飲んでいくヒルトネンに、若干の揶揄をこめ「たまには友達でも連れてきたらどうですか」とミドリが訊ねる。するとヒルトネンは「トモダチ・・・？」と聞き返す。ミドリが軽い調子で「いないんですか？トモダチ」ときくと、ヒルトネンは否定も肯定もせず、静かにほほえんでいる。ミドリはそこで「いないんだ・・・」と引きながらつぶやく。互いに興味があるフリ、仲が良いフリをしなくてもよいがゆえの、取り繕いのない、本音の関係がここにはある。そして、友達がいることが「普通」であり、「当たり前」と考えるミドリとは対比的に描かれるヒルトネンの静かなほほえみは、友達の有無や、数の多寡と、豊かさや幸せが、必ずしもイコールでは結びつかないのかもしれない、友達とはなんだろう、という視るものへの問いを含んでいるように思われる。

3-2-2 言語を超越した交歓：マサコ×酔っぱらい

次に、ヒルトネンとは日本語ができるゆえに起こらないが、酔っぱらいのフィンランド人女性とマサコとの間におこる交歓について指摘したい。

かもめ食堂で泥酔し、昏倒した女性を自宅まで送り、そこで彼女から涙ながらの語りを聞いたマサコ。ふたりの間には共通言語がなく、普通なら通訳なしで会話が成り立ち得ない、はずである。しかしマサコは泥酔した女性の身上話を後でミドリとサチエに話して聞かせる。いわく、夫に出て行かれてしまった、突然のことで、理由は全くわからないのだと。ミドリ達はふんふんと聞いていたが、あれ？マサコさん、フィンランド語でできましたっけ？と訊ねる。マサコは「いいえ」と答えるのみで、それ以上は語らない。

共通言語をもたない二人が、このように語り合える、ということがありうるのだろうか。スポーツを介して、音楽を介して、ことばを越えた云々ということはしばしば異文化交流の世界で使われる常套句である。しかし、ここではスポーツも音楽も介していない。むしろ「ことば」を介しての「ことばを越えた」理解が題材になっているのである。

繰り返しになるが、異文化理解・異文化交流では、言語は交流と理解の鍵といわれている。しかしこの世界は、そのような種類の「現実」からのみ成り立っているわけではない。話される内容よりも、どのように存在しているか、どのように話を聞き、どのように寄り添うか、と

ということが重要な意味をもつ場合がある。このときは女性が泥酔して涙を流している、理性を失っている（相手がフィンランド語ができるかどうかを判断することすらできない）、家族の写真を見せて語る、などのノンヴァーバルな信号がふんだんに発せられていることもある。しかし重要なのは、話の聞き役が、両親の介護を二十年つとめあげ、海外旅行にやってきたマサコである点である。夫に出て行かれたこと、長期の介護と、苦労の種類は異なっている。しかしそこには「誰にもその痛みはわからないし、比べられない」という意味での「共通の」苦労、普遍的な痛みのわかちあいがおこなわれる。そのとき、言語を越えた感覚の共鳴が行われ、いわんとしていることがおのずと伝わってしまう。

とはいえ、なぜここで言語を超越した共通理解が可能だったのか、ということを探るのは、あまり意味があることとは思えない。それよりも、稀にはあるが、ときとして人間の間にはそういう関係性が生じることが描かれていることの意味を問うべきだろう。ことばを越えた理解が、アートやスポーツや食だけでなくことばを通して成立する、というエピソードを、あえて取り上げることの意義である。いわゆる現実社会においては、ビジネスを行ううえでも共通言語がなければ契約が成り立たない。但し、そうした「現実」の世界では、人間は交換可能な「人材」として存在している。買い物をするのに、担当者がAさんであれBさんであれ、あるいはそれが自販機やネットを介したものであったとしても、大きな差し障りはない。そこで重要なのは、基本的には目的の遂行であり、結果であり、そのとき言語とは制度としての言語・規範としての言語である。だがこの世界はそのような種類の現実からのみ成り立っているわけではない。話される内容よりも、どのように存在しているか、どのように話を聞き、どのように寄り添うか、というたまたまいの方が重要な意味をもつ場合がある。そのような瞬間、AさんはBさんと決して交換ができない存在となる。

このように、ミドリとヒルトネン、マサコと酔っぱらいという二組のコミュニケーションを通して、ことばの意味が通じることが必ずしも人間関係を近づけるものではないこと、逆にひとつひとつのことばの意味がわからなくても、全体の文脈によって他者の存在やメッセージを受け止めることが可能であることが対比的に描かれ、映画は〈通じること〉と〈通じないこと〉の〈あいだ〉の存在を視るものに投げかけている。

3-2-3 頭一心一体の相互疎外状況の克服：サチエ×気

ここで、主人公サチエのコミュニケーションの対象を特定の人物ではなく、「気」としたのは、サチエが合気道をしているからである。日々合気道の基本的動作である膝行を行わないと気持ち悪くて眠れないというサチエは、三人のなかで一番バランスがとれているようでいて（あくまで「三人の中で」だ）、しかしこだわりのありそうな面もある。「どういうわけか、母親が死んだときは泣かなかったのに、嫌われていた猫が死んだときは泣き続けた」という台詞が映画冒頭のモノログにある。自分でも「どういうわけか」理由がわからない。大好きだった母親が死んだときもものすごく悲しかった。それなのに涙は出なかった。嫌われている猫が

死んだときは…、ということ語ることで伝わってくるのは、サチエが自分の感情や気持ちよりも、身体の反応にこそ注意を深く払いながら生きていること、感情や気持ちよりも身体を土台にしているということ、出来事を身体がどう受けとめるかを、頭や心に浮かんできたことよりも信じている、ということであろう。このことは、手塚（2009）が指摘する、「頭・心・体のコミュニケーション」の重視、つまり「普段は頭が優位で、（…中略…）体、心のメッセージは頭に届きにくく、体と心も分断され相手の言い分を聞けない」という相互疎外状況を、「気」とコミュニケーションすることでサチエが回避していることを象徴する。またこのモノログは、一方では、家族という血縁よりも、生物としての異種間での関係性が「涙の量」という一点においては勝っており、血縁や生物として同じ種に属するという属性が必ずしも絶対的に全ての点において勝るものではないことを示しているとも受け取れる。

以下、サチエに描かれるエピソードを箇条書きでまとめてみる。

- ・サチエの出す料理は、「自分がおいしい」と感じる日本の家庭料理である。いわゆる寿司、天ぷらという「代表的な」日本食、海外で知られた和食ではない。店内のBGMもお琴などの邦楽だったりしない。接客に着物やゆかたを着るわけでもない。擬似的な“日本”の演出はしない。居抜きでかりた店をそのまま用いている。
- ・ある日、訪れた客から「コピ・ルアック」というコーヒーをおいしくするおまじないを教えられる。本人も半信半疑ながらに試してみると、「豆を変えたのか？」などといわれ、どうも評判がいい。とりあえず非合理的だけれども受け入れてみる。これも、科学や論理よりも身体の反応を重視しているエピソードである。（なお、対比的に描かれるのが、前述の泥酔していたフィンランド人が、たまたま3人から聞いた「呪いのわら人形」を実行するシーンである。現代日本ではほぼ消えた習俗であり、顧みられるどころか、どこか滑稽ですらある習俗が試みられる。サチエも泥酔女性も、論理的な根拠よりも、行為や現象にこそ信頼を置いている。）
- ・ミドリが店に繁盛してほしいと出してきたアイデアおにぎりについて、サチエは頭ごなしに否定せず、とりあえず試しにつくってみる。しかし地元の食材であるトナカイやニシンを使ったおにぎりはどこか無理矢理、ちぐはぐな出来になり、ヒルトネンも飲み込むのが精一杯。結果的に、おにぎりの良さ、素材の良さ、それぞれのいいところを打ち消し合うことになった。これも、ことばで説明するより、試してみてもわかった、というエピソードである。頭で考えたハイブリッド文化よりも、身体の反応を優先させている。
- ・シナモンロールの「匂い」をきっかけに、食堂とサチエをいつもうさんくさそうに眺めていた中高年女性三人組が店に入ってくる。彼女達は、特に日本に興味はない（むしろサチエをあやしんでいた）。ここでも、マーケティングや宣伝の成果ではなく、いい匂いにつられるというダイレクトな身体の反応がきっかけとして描かれる^{iv)}。

3-3 存在の交換不可能性：エンディングの「いらっしゃい」

映画は、主人公らの三者三様の「いらっしゃい」という挨拶で終わる。会話のなかで、三人が互いの「いらっしゃい」を論評しあう。それぞれに対して出された意見は、次の通りである。

マサコ・・・「丁寧過ぎる」

ミドリ・・・「乱暴・ミドリらしい」

サチエ・・・「なんとなく、いい」

マサコの挨拶は、街中の小さな食堂としては客に対して距離がありすぎる。ミドリの挨拶は、なんともいえないぎこちなさ、不自然さがある。客もどうしていいかわからずとまどうかもしれないし、波長が今ひとつ合わない感じである。しかしその波長のずれっぷり、マニュアル化できない身体をもつ点が、ミドリらしさ、なのである。サチエのそれは、客と、店と、自分の「気を合わせて」丹田から発せられており、まっすぐ客に届く。距離感も絶妙である。が、しかし、この三つの「いらっしゃい」がそれぞれあってもめ食堂が成立している。全部必要で、ひとりひとりがパーフェクトな、あるいは誰かのような人間になれなくてもよい。どこかいびつであったり、丁寧すぎたり、ぎこちなくても構わない。誰も、誰かの「いらっしゃい」を変えることはできないし、誰かの「いらっしゃい」を装う必要もない。

3-4 『かもめ食堂』にみられる身体技法

以上、上述した身体技法を要約すると、以下ようになる。

- ①血縁や生物の種類、人種にひらかれる（例：冒頭のモノローグ）
- ②非合理的なものにひらかれる（例：コーヒーのおまじない、呪いのわら人形）
- ③頭で考え過ぎず、他者にあわせ過ぎず、無理をせず、おもねらず、自分の感覚にひらかれる（例：トナカイ肉のおにぎり・漢字の選び方・ナイフとフォークで生姜焼き）
- ④他者の痛み・苦痛にひらかれる、それらをわかちあい、いたわりあう（例：マサコと泥酔女性）

上記をひとことで要約するなら、「ひらかれ」といえるだろう。手塚（2009）は、学びのプロセスとしての「ひらく」に着目し、その対象として感じることや表現、非言語や無意識の世界、未知の体験、自己の可能性や潜在性のほか、場やプロセスに自分を委ねる根源的ひらき、内的プロセスへのひらきをあげている。映画『かもめ食堂』はこうした「ひらかれ」の技法による学びと変容を肯定する態度に貫かれている。

むろん、異文化間コミュニケーションの現実では、「ひらかれ」ばかりが起きるわけでは当然ない。たとえば山ノ内（2006）は、海外で感じた疎外感や居心地の悪さが、異文化適応能力の問題ではなく、日本人性という構えにからめとられていたことに由来する「からめとられ」の詳細を論じている。『かもめ食堂』のような作品が生まれる背景・土壌には、山ノ内に

限らず、誰もが無意識のうちに「構え」にたやすくからめとられやすいという現実を見据えねばなるまい。更にこのことは、国境を越えた「異文化間」に限られたことではない。人と人との間には、たとえ家族であっても差異があってしかるべきである。にもかかわらず、同調圧力の高い日本では、無意識の「構え」によって、知らず知らずのうちに自縄自縛になりやすい。差異があたかも存在しないようにふるまい続け、気づけば他者や社会に合わせすぎて、ストレスを高め、身体やこころを壊していた、という話はよくある話である^{v)}。

また、戴（2005）や高橋（2003）が指摘する、他者を分類し名指すという善意の人間の加害者性、暴力性は、全編を通してミドリに象徴されている。ミドリはあくまで善意の人であり、悪意など微塵ももっていない。店に繁盛してほしいからとフィンランドの特産物を探し、フィンランド人は〇〇だと思っていた、と無邪気なステレオタイプを披露する。しかしそんな些細で素朴なエピソードですらも、実は他者理解の文脈ではいつでも加害者になりうる。だが、そのような加害可能性を無視せず、また糾弾するのでもなく、そこにきちんと応答するのが、この映画の描く加害可能性との共生の作法である。人は人を傷つけることなしに生きて行くことは不可能だ。もし、この映画にミドリが欠ければ、それは途端に他者を分類し名指すという、他者への加害可能性を無視した映画になってしまうのである。

さて、この映画の最初と最後では、何か人物達に変化が生じたのだろうか。食堂の客の入り方以外、各人物の個人レベルで生じた変化の有無について考えると、言語化することが難しい。荷物を紛失したマサコが、フィンランドの鮮やかなデザインの服を身にまとうというような変化もあるにはあるが、内面的な変化については、とりわけ言語化しづらい。しかし、他者からは指摘しづらいレベル、気づかないレベル、自分でも言語化できない、自覚できないレベル（身体レベル）での、変化が起きているのではないか。同時に、人間が変化するというのは、そういう身体レベルのものでないと、「変化」と呼ぶには値しないのではないかということも、思い至る。それは、教育の世界、とりわけ外部からの評価において本人や他者による数値化・言語化を求め、またそれを変化だとする方法とは、質を異にする「変化」である。そして何より、ひとりひとりの測定可能な変化からは距離を置きつつ、関係性の変化がおのずと浮かび上がる点に、個人の変化というモノサシに捉われている近代の教育学に根ざす神話を乗り越えることの意義を読み取ることができる^{vi)}。

4. 共生のための教育に求められる関係性への気づきとひらかれ

教育の世界では、コミュニケーション能力の育成が目標論として語られることが少なくない。しかし現実の世界には多様なコミュニケーションの技法があり、人間もひとりひとり偏りがあったり、どこか歪つであったりするわけで、コミュニケーションの技法に一つの理想や定型があるわけではない。ミドリもマサコもヒルトネも、どこか偏りがある。しかしそれぞれの偏りが編み込まれて「共生」の営みがある。ここでたまたま軸となるのは「サチエ」であっ

ても、サチエひとりで「共生」は成り立たないし、「サチエ」のコピー人形がどれだけ量産されても、それを「共生」とは呼ばないはずである。もし、共生のためのコミュニケーション能力を個人がそれぞれに獲得すべき、個別の能力の集合ととらえ、それが明文化されうると考えるならば、それはコピー人形を量産する思想である。コピー人形になれなかった個人は、社会への参加の機会を奪われる。それは誰しもが交換可能な存在となることを意味しており、共生とは矛盾する。何のための共生が問われているのか、という現在の問いの立て方自体を問いなおす必要はないだろうか。仮に、ひととひととの間、あるいはひとが集い合う場に、どのような関係が生起しうるか、という視点からとらえるならば、ひとりひとりの「偏り」が活かされる社会をつくるのが、すなわち個人の〇〇力の育成とひとしく、否、むしろそれよりも優先されるべき課題となるはずである。現在の「コミュニケーション能力育成」を個人の技術習得のようなものととらえ、「コミュニケーション能力育成」の看板を掲げた時点で、隠蔽されるもの、見えなくなってしまうものがあるのではないか。むしろ、必要なのはコミュニケーションを引き出すための場であり方法であり、(空気を読む・読まないではなく)無数の関係性があったという意味での関係性への気づき (relationship awareness) を培うことではないだろうか。

更に、教育や交流そのものの「ひらかれ」が必要である。プログラムなりプロジェクトなりに、異文化交流を目的とした看板を掲げてしまうと、「興味のない人」「それどころではない人」には届きづらいというジレンマが生じる。「異文化」に興味の在る人だけが集まり、その人たちだけで固まるなら、それは「異文化に関心のあるひと」「ないひと」との棲み分け状態をつくっている、といえる。ならば、共生のための教育の実践においては、戦略的にあえて「異文化理解」「異文化交流」を参加者に感じさせない、意識させない実践、そのための場づくりや方法を掘り下げていくことで、むしろ従来の異文化間教育が本来ターゲットとした社会の多数派や、異文化交流に関心のない人々を学びに巻き込んでいく可能性がないだろうか(無目的性を戦略的に利用した「三田の家」の実践(熊倉ほか、2010)なども、その好例である)。戴(2005)は、異文化の強調は「他者意識を必要以上に形成してしまう」可能性があり、むしろ重要なのは「人の経験レベルの文化実践に着目すること」であるという。「かもめ食堂」では「日本」「フィンランド」ということをあえて語らずに関係性を創り、食という経験レベルの実践を保ち続ける。日本とフィンランドの交流のために食堂があるのではなく、お腹がすいた人と、食事を作ることで生活していきたい、という人がいて、それがたまたま、日本人とフィンランド人だった、というだけ、という描き方だ。フィクションだからそんなことが成り立つ、といってサチエの姿勢をなかつたことにするのではなく、あえてこのことの持つ意味を読み取るならば、そこにあるのは、括弧つきの「異文化交流」からはあえて距離を置きます、「異文化」の強調はしません、というメッセージだ。

このような視点は、日常のなかにあるさまざまな行為や経験が、決してそれと名乗っていないけれども、実は結果として間文化性の創造を促し得るのだという、ものの見方の転換、あるいは

気づきを促すものである。むしろ異文化理解や交流のためのプログラムの価値を否定するわけではない。しかし、それらに興味のない人たちや、それらにかかわる余裕のない人々への〈共生のための教育〉の届け方を考えるとき、このような「あえて交流や理解を目的化しない」戦略が奏功することがある、ということ、それらがある種の学びを促すことに、注意を傾けることが必要ではないだろうか。

終わりに 共生へのベクトル:呼びかけ合う『かもめ食堂』と『ムーミン』の世界

最後に、共生のための教育の問い直しについて、同じフィンランドを舞台とするムーミントロールの物語を手がかりにこの映画を考えてみたい。というのも、サチエがミドリと知り合うきっかけとなったのは、ミドリがカフェでムーミン童話を読んでいたのにサチエが気づいたことにある。このことは、映画の舞台が偶然フィンランドだったのではなく、フィンランドでなければならなかった理由のひとつと思われる。『かもめ食堂』とムーミンの世界とに通底する世界観とは何か。高橋（1990）によれば、ムーミンの世界とは「みんなが好きなように生きているうちに、だれかが救済されてしまう世界」である。高橋はいう。「〈助けてもらう・助けてやる〉関係のない救済は、ムーミン童話のあちこちに描かれています（…中略…）、助けられた者が助けてくれた者にあとで恩義を感じるとか、犠牲的精神を發揮してだれかを助ける、というようなことは起きていません」。〈支援する—される〉あるいは〈ケアする—される〉という個別の関係性やそこでの行為ではなく、より複雑で大きな関係性、場そのものが深く呼吸するかのように有している意味や豊かさ、そこにあるケアの編み目、関係性の編み目の重層性・弾力性という点で、二つの世界は呼応している。

ここで冒頭の筆者担当の授業に戻ると、学生達が共生を学ぼうとする際、テーマによっては、そこにある関係性すなわち〈支援する者とされる者〉という関係性に行き詰まることがままある。共生というと弱者を捜し出し助けなければいけない、助けることができなくても、なんらかの貢献となるようなアイデアを出すなり、しなくてはならない、と考えるようである。しかしそのとき、学生達は〈する者・される者〉の間にある溝に直面する。その結果、自分たちには何もできないという無力感や諦め、あるいはある問題に関する社会の無知や無理解への他責的なことば遣い、更には「私たちはもっと思いやり／関心を持つべきだ」という徳目主義的な「べき論」を招きがちである。しかし、自分を犠牲にするのでもなく他者を弱者と位置づけるのでもない、他者とのつながり方、関係性の築き方があることや、〈する—される〉という関係を乗り越えたいという希望を持っていることを自覚することは、スローガンになりがちな共生に内実を加えるための重要な足場になるのではないか。そのうえで、身体というチャンネルに自分を委ねたり、場を捉え直したりすることで、むしろ後からヒントが見出されることがあるのではないか。高橋（1990）はいう。「この世界は、人々が対等で、生き物としての尊厳が守られ、自由で、個性的で、自立していく社会をめざしている」。共生の完成状態ではな

く、共生へのベクトル自体が焦点化され、描かれているのが、ムーミンの世界であり、そこでは場や身体のプロセスへのひらかれこそがテーマとなっているといえる。

本稿では、間文化性を創造する共生へのベクトル「互いにトラブルのない棲み分けという状態」と、「たまたまめぐりあわせた、居合わせた人に過ぎなかったのに、いつの間にか交換不可能な状況になっている」という、そんなふたつの状況をどう結ぶのかということ、文化の“はざま”の創造に着目し、それを創造する視点としての身体について考察してきた。「かもめ食堂」では、フィンランド人の客が、豚肉の生姜焼きをナイフとフォークで食べている。ここには、フィンランドでも日本でもない、どっちつかずの空間が誕生し、この世界が便宜上区切られていても、本来は「区切ることのできない世界」（片井、2010）であることを物語っている。改めて、共生とは、互いにトラブルのない棲み分けという状態と、「たまたまめぐりあわせた、居合わせた人に過ぎなかったのに、いつの間にか交換不可能な状況」になっているという、そんなふたつの状況を∞の字のように行きつ戻りつしているベクトルをいうのではないか。ならば、その「行きつ、戻りつ」を促し、棲み分けと交換不可能性の「あいだ」そのものを創造する、そのための場と方法の検討が、個人の〇〇力育成とは別の、教育のパラダイムとなりうるのではないだろうか。

【引用文献】

- 片井修（2010）「共生のための脱システム論を求めて」片井修最終講義資料，於知恩院 <http://www.symmlab.sys.i.kyoto-u.ac.jp/taikan/finallecturenote.pdf>（2013年3月24日アクセス）
- 熊倉敬聡，長田進，坂倉杏介，岡原正幸，望月良一，手塚千鶴子，武山政直（2010）『黒板とワイン もう一つの学び場「三田の家」』慶応義塾大学出版会。
- ジョセフ・ショールズ（2013）鳥飼玖美子監訳・長沼美香子訳『深層文化 異文化理解の真の課題とは何か』大修館書店。
- 戴エイカ（2005）「多文化共生」と「日本人」—「文化」と「共生」の再検証、『異文化間教育』22号，異文化間教育学会，27-41。
- 高橋静男（1990）「解説 出会い」トーベ・ヤンソン著，山室静訳『ムーミン谷の仲間達』講談社，266-269。
- 高橋舞（2003）「加害可能性を前提にしたホスピタリティ（歓待精神）—共生教育で提案される共生的な態度」『異文化間教育』19号，異文化間教育学会，85-101。
- 手塚千鶴子（2009）「身体知実験授業と異文化コミュニケーションとの対話の試み」『異文化間教育』29号，異文化間教育学会，29-39。
- 細川英雄（2012）『「ことばの市民」になる 言語文化教育の思想と実践』ココ出版。
- 山ノ内裕子（2006）「日系人研究における「差異化」と「他者性」—ブラジル日系社会でのフィールドワークの経験から」『異文化間教育』24号，異文化間教育学会，27-40。

【注】

- i) 私立の文系学部における授業。「共生社会論」または「共生社会とことば」というテーマで、2011年より現在（2014年）まで担当。選択科目、各半期15回ずつ。受講者は2年生から4年生、登録者数はほぼ変わらず毎回35人程度。
- ii) たとえばショールズ（2013）は「海外体験によりかえって、ステレオタイプを助長したり、出会った人々を批判したり冷淡になったり、違いをけなしたりするようにもなる」という。
- iii) <http://ja.wikipedia.org/wiki/かもめ食堂>（2013年3月24日アクセス）をもとに修正した。
- iv) 映画のなかでサチエが店や自分の説明を自分からしないこと、ガイドブックにも情報を載せることをせず、宣伝や広報をしないことは、映画の非現実的・寓話的な部分のひとつである。このサチエの基本姿勢は、高橋（2003）が指摘する、自らを名乗ることや他者を名指すことによる暴力や加害者性を反動的に想起させるし、他者の好奇の視線を受け入れる構えは「受動性を核としたホスピタリティ」を想起させる。
- v) こうした同調圧力のもたらす苦痛については多くの文献があるが、ここでは倉地暁美（1998）『多文化共生の教育』勁草書房、庄井良信（2004）『自分の弱さをいとおしむ—臨床教育学へのいざない』高文研、をあげるにとどめたい。
- vi) 付言すれば、本編最後近くに最も寓話的な、サチエがプールで拍手されるというシーンがある。本稿冒頭で述べたような内輪の共生ではなく、流動的で、固定的でなく、風通しのよい共生、境目のないプールで、あいだに水をたたえてつながりながらも、それでいて個人ひとりひとは自立している状態の一瞬の実現に対して、全面的な肯定が描かれる。

（平成26年11月4日受理）